（様式1）

令和5年度　学力向上指導改善プラン

三田市立すずかけ台小学校長　山口茂樹

学校教育目標			夢に向かって共に歩む児童の育成
推進主体			管理職と研究推進委員・生徒指導担当を中心に学力向上委員会を設置して実施。
学力に関する前年度の状況・経年の課題等			
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語	○正答率78%で全国平均を12ポイント上回った。（全ての領域で全国平均を上回った。） ○特に、記述式の3問は13～21ポイント大幅に上回っている。目的や条件に沿って文章で表現する力が定着している。 ○物語の複数の本文を関連づけて、読み深める問題で正答率が86%あった。複数の情報の因果関係や伏線をとらえる読み方が身についている。この力が読書活動の土台となっている。 ○書き方の工夫を見つける問題の正答率が全国平均を20ポイント上回った。字のバランスを評価する問題の正答率が9割近くあった。日ごろからめあてに沿ったふり返りを書くことによって、身についた力を意識できていることが分かる。
		算数 数学	○正答率76%で全国平均を12ポイント上回った。（全ての領域で全国平均を上回る） ○図で示されたわり算の意味を数字や言葉を使って説明する問題では正答率が9割を上回った。日ごろから、答えを出すだけでなく、式の意味を考えて説明する習慣が身についていると考えられる。 ◆割合で「もとにする量」を1としたときの「くらべる量」に当たる部分を図で説明する設問では正答率が5割程度であった。課題が残る結果である。抽象的な概念について、図や表などの具体的な資料を使って説明する学習活動を充実させたい。（経年）
		ICT機器を効果的に活用した取り組み状況	○プログラミングによって図形を描く動きを問う問題での正答率が全国平均を40ポイント上回り、正答率が9割程度あった。算数の学習にタブレット学習を取り入れている成果である。 ◆基礎学力定着への手立てとして、「ドリルパーク」などのタブレットを利用した個別指導を導入しつつあるが、活用方法や定着度の見取りについて工夫・改善が必要である。
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		○学期末のまとめテストにおいて、国語や算数の基礎学力がおおむね定着していると判断できる児童は9割程度いる。
	授業等からうかがえる状況（各教科）		○児童が課題に対して自分の考えを持ち、話し合うことを大切にした授業づくりを進めており、学習の流れを理解し、積極的に取り組む児童が増えている。話し合い場面で発言したり、考えをノート、ポートフォリオ等にまとめたりする学び方を学年に応じて学んできている。 ◆わかりやすく話すことのできる児童は多いが、発表について苦手意識を持つ児童もおり、発言する児童が固定化する傾向にある。 ○学習の終末に学びのふり返りをする習慣によって、考えや感想を文章化する力が定着している。
学力向上に係る学習習慣・生活習慣等の状況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		○朝食、就寝、起床時刻など、学力を支える生活習慣に関する項目については、概ね良好な結果であった。 ○家庭での学習時間が1時間未満の児童が41%と、全国平均を10ポイントも上回る。家庭での学習習慣の定着について課題がある。 ○ICT機器活用は「毎日使う」の回答が64%と全国平均を38ポイント上回っている。また「ICT活用は勉強に役立つ」の回答は86%と全国平均を20ポイント上回っている。ICTの効果を実感している。 ◆平日3時間以上ゲームをしている児童が10%。前年度より18ポイント、全国平均からも10ポイント下回った。改善傾向にある。引き続き、携帯電話やスマートフォンを使用するときの家庭でのルール作りを啓発していきたい。
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○家庭での会話、学習、手伝い等は良好である。 ◆家庭での読書においては、親を子の意識に大きな隔たりがある。家庭学習においては1年生の読書習慣の定着が7割となっており、他学年が9割に対して低い。児童の主体的な学習力を育てる必要がある。（経年）
校内研究・研修の状況	校内研究・研修の状況		○4月の研推研修により、研究の方向性や見通しを教師間で共有している。「思考力の育成」「ICT活用」「小中連携」のキーワードに沿って授業研究を進める。 ○「可視化・操作化・構造化」を手立てとして思考力を育成する単元づくり、学習づくりを推進する。 ○「環境作り・教科書分析」「個別・朝学習」「ノート・タブレット」のチーム会に分かれ、全ての教師が研究に関わる体制を組織する。本年度は、全てのチーム会が「ICT活用」をテーマにして活動を進める。 ○公開授業については「授業まとめ」によって、その実践の価値を記録し、教職員全体に広げる。 ○「実践記録」「ノート事例」を交流し、実践の価値を共有する。 ○「実践記録」「ノート事例」などを研究紀要にまとめることで、実践をするうえでの大切なポイントを次年度につなぐ。
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況		◆家庭では宿題をしているが、読書、自主学習を行う児童の割合が少ない。（経年） ◆「地域の行事に参加している」の回答が47%と、前年度の65%から低下している。コロナの影響があると考えられるが、経過を見ていく必要がある。
	小・中における教科連携等の状況		○オープンスクールの参観、小中合同クリーン作戦、生徒指導連絡会、学校園所連携会議などを行っている。教科学習の円滑な接続を目指している。 ◆今後、中学校区で「子ども像」を共有し、小中を見通したカリキュラムを作成する必要がある。

4月			2～3月	
学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標 （指標となる数値等）	具体的な行動目標 （成果目標達成のための具体的な手立て等）	年度末評価 （今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
1.授業スタイルの確立 ○「すずかけ学習スタイル」に沿って ・めあての共有 ・一人学び ・交流 ・ふり返り の学び方の流れを共通理解	・ふり返りの記述をもとに評価 ※めあてに沿った学びを具体的に書く。 ※自分の考えの変化を書く。 ※参考になった意見を書く。 ・多様なグループ、ペア・全体交流を授業の取り入れ、実践記録として残す。 ・学力テストの「質問の意味」を問う問題で、全国平均を5ポイント以上上回る。 例 国語③ー（1）（2）	・研究の方向性、年間計画、授業作り、ICTの活用方法などの確認（年度初めの研推研修） ・めあてや学び方の明示及びめあてを意識したふり返り ・課題設定の工夫、効果的な言語活動の重視 ・一人学びで自分の考えを持ったうえでの交流 ・ペアトーク、グループトーク、全体交流を組み合わせた学びの分かち合いの重視 ・「オクリンク」「ムーブノート」を使った効果的な交流学習のあり方を開発・共有		
2.思考力・判断力・表現力の育成 ○基本的な学び方の定着 ・ノート指導（タブレット活用も含む） ○考える力の育成	・ワークシートやノートに自らの考えや友達の考えなどを書き、学習の足あとを残す。 ・図、表等を用いながら物事、数量の関係を捉え説明する。 ・めあてに対してふり返りを書き、身についた学びを意識できるようにする。 ・キーノートやオクリンクを使い、キーワードや効果的な資料をもとに主張を伝える。 ・適切な思考力を使いこなして、課題を解決したり、考えを深めたりする。 ・学力テストの考えや解き方をを記述で説明する問題で、全国平均を5ポイント以上上回る。 例 算数①（3）、③（2）	・段階に応じたノートの書き方の徹底指導 （課題・式・図表・理由、ポイントの記入） ・自らの考え、思考過程、解法の理由・根拠の記入を指導 ・一人学び、図や表・ふり返りのかき方のモデル提示 ・めあてに対する具体的なふり返りが書けているかのチェック ・タブレットを使ったプレゼンテーション活動（高学年） ・比較によって共通点や相違点を見つけ、意見や考えを作る指導 ・分類することで集めた情報を整理する指導 ・複数の情報を関連づけることで考えを深める指導		
3.個別指導の充実 ○朝学習・補充学習を充実と低学力児童の個別指導 ○基礎的な内容について日常的な指導の工夫	・計算や漢字の小テストを個の課題に応じて取り組み、計算力・漢字力を伸ばす。 ・各教科学習で漢字計算などの基礎的な力を使い、生かせるようにする。 ・復習の仕方、復習ノートの作成を個別指導する。 ・アプリを使った朝学習を実施し、個々の学習状況を把握して、指導に生かす。	・朝学習のめあて設定。 ・学習相談日や「がんばりタイム」による個別指導 ・個々の課題に応じたプリント学習の反復による漢字計算で9割以上の定着を達成 ・ドリルパークを活用し、個の課題に応じた計算や漢字学習を推進 ※ドリルパークによる学習履歴の見取り方の研究・開発 ・九九など基本的な事項の生活化・反復・ゲーム化 ・復習項目（ポイントやキーワード）を使ったまとめ		
4　読書活動の推進 ○学校司書・図書ボランティアや図書委員会と連携した推薦図書紹介活動の強化 ○国語科、社会科などの教科学習や総合的な学習などと連動した読書活動の推進	・図書室利用度を高め、本が好きな子の育成を目指す。 ・市の読書アンケート「本がすきですか」の項目で肯定意見90%以上 ・学校評価アンケート項目「家庭で読書していない」の親子の意識格差の減少 ・学校司書と連携し、各教科等で計画的に読書活動を行い、各学年学期1回程度の年間実績にする。 ・電子図書館活用人数、冊数を増やす。	・探調ツールの統計機能を使用し、利用者数の記録を取る。 ・学校司書を中心に読書通帳の活用、本選びや読書時間の取り方を助言するとともに、図書ボランティアと連携した読み聞かせの機会活用、掲示物の工夫による本紹介を行う。 ・読書通帳の記録を読書の実績として保護者と共有する。 ・図書委員会（児童朝会ビブリオバトル風）本の紹介を行う。 ・電子図書館で読める本の紹介をする。 ・電子図書館活用の状況を伝える。		
5　研究推進による主体的な学びづくり ○年間を見通した学習計画・指導案づくり ○一人一授業の実施 ○実践事例の交流 ○各チーム会に分かれての取り組み	・年間計画の作成と一人一授業の公開 ・事前・事後研修会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有 ・教職員間で交流した実践記録・授業まとめを研究紀要にまとめ、次年度まで活用 ・各チーム会の実践例を研究紀要にまとめ、教職員間で共有	・「課題設定のあり方、相互交流場面の工夫・充実」に視点をおいた指導案の作成 ・児童自らが見通しを持ち、課題を深化させ、成果をふり返る授業づくり ・事前研・事後研を位置づけた公開授業研修の充実 ・実践記録を通して、お互いの実践の価値や課題を共有 ※特にICTを活用して児童の思考力を育てる実践事例を共有・活用（実践記録交流会） ・「環境作り・教科書分析」「個別・朝学習」「ノート、タブレット」の3チームに分かれた研究推進チーム会の実施及び成果の共有。特に「教科書分析チーム」によって、中学校の教科書を分析し、思考力の系統を明らかにする。		
6　学校園所の連携	・コロナ禍の中でも、できる形を工夫しながら学校園所連携に継続して取り組む。 ・学校評価アンケート（職員）の「学校園所連携」の項目で、9割以上の肯定評価をめざす。	・児童理解を図るため、ウッディ・カルチャータウン青少年健全育成連絡協議会を定期的に開催 ・年間を通じた継続的な学校園所交流の計画的な実施 ・学校・園だよりの交流 ・けやき台中学校生の「トライやる」の継続 ・けやき台中校区で「めざす子ども像」に向けたカリキュラムを作成する。		
7　家庭や地域との連携	・年2回の児童・保護者アンケートから、その結果を分析し、成果と課題を家庭と共有する。また、どの項目も「できている」が80%以上になるよう取り組む。 ・地域支援ボランティアとの連携を計画的に進める。 ・学テ質問紙「地域の行事に参加している」の項目で、肯定意見が昨年度の50%以上をめざす。 ・学テ質問紙「1日どのくらい携帯電話やスマホ、SNSや動画視聴するか」の項目で、3時間以上を20%以下にする。	・保護者にスマホ・ネット・SNS・ゲーム機などの使用時間を問い、家庭でのルールづくり等を啓発 ・アンケート結果より、把握した成果と課題等を、学校だよりや学年通信等を通して公表・共有 ・コミュニティスクールの推進を図るために、年間を通して学校地域運営協議会を計画的に開催 ・地域コーディネーターと校内地域連携担当を中心に、学校支援ボランティアと連携した授業の工夫、推進 ・学校支援ボランティア推進計画、年間予定表を参考にして派遣依頼書を作成し、活動の実績記録を残す。		